

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 社会福祉法人 さぼうとにじゅういち

1. 事業名称

外国人住民・日本人住民 共育ち日本語教室展開事業

2. 事業の目的

本事業の目的は、日本に暮らす外国人住民と日本人住民が共に学び、共に社会の一員として成長できるような日本語教室を展開していくことである。

また、国の施策の一環として文化庁が主体となって進めている「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」(以下「カリキュラム案」)につき、現場での実践に基づいた発信をしていくことも事業実施の目的の一つである。

当団体は平成 23 年度、文化庁委託事業として「定住外国人のための 60 時間参加型日本語講座」を実施し、「標準的なカリキュラム案」を活用した日本語授業を試みた。その終了時に抱えた「自分たちは期待される授業が行えたのだろうか」「ただの情報の詰め込みをしたに過ぎないのではないか」「行為の達成ばかりを意識し、より重要な側面である対話や相互理解が行えなかったのではないか」「生活上の行為が行えること＝彼らの社会参加の第一歩と言えるのだろうか」「そもそも期待されている生活者向け日本語授業はどのようなものだったのか」等の様々な疑問を解消すべく、今年度もその発展延長線上で「標準的なカリキュラム案」が有効に活用できる方法を模索した。

今年度は以下の通り5つの目標を設定した。

- 1 「標準的なカリキュラム案」と「教室」をつなぎ、それぞれの教室独自の形で日本語授業を実践できるファシリテーターを養成すること
- 2 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育を実施することにより、外国出身者、ボランティアが対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させること、双方の社会参加を可能にすること
- 3 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育の実践例を公開し、地域日本語教室に「標準的なカリキュラム案」をより身近なものとしてとらえてもらうこと
- 4 授業実践を通じて「標準的なカリキュラム案」のより効果的な活用のあり方を検討するとともに地域日本語教室で利用しやすい具体的な方策を検討すること
- 5 「標準的なカリキュラム案」をより効果的に活用していくための具体的な方策の一つとして、視聴覚教材(動画教材・音声教材)を作成すること

3. 事業内容の概要

以下の通り、実施した。

1 日本語教室(「難民のための参加型初級日本語講座」)の設置運営

「標準的なカリキュラム案」をベースに、対話・相互理解に重きをおいた日本語教室を設置運営した。日本語学習を受ける機会が少ない難民等を対象として、視聴覚教材を活用した授業を実施した。

2 日本語教育を行う人材の養成・研修(「日本語教室ボランティア 振り返り&学び合い講座」)の実施

「標準的なカリキュラム案」を利用し、それぞれの教室のニーズや希望にあった日本語教室の設置・運営、日本語教育の実践のできるファシリテーター養成を目指し、日頃の教室活動の振り返り、課題掘り起こし、参加者一人一人の実践を盛り込んだ研修を実施した。

3 日本語教育のための学習教材(「生活場面切り取り動画」)の作成

「標準的なカリキュラム案」活用に有効と思われる生活場面切り取りの動画教材を作成した。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成24年7月12日 17:00～ 20:00	3時間	認定NPO法人難民を助ける会 ボランティアス ペース	高橋 敬子 奥原 淳子 ディラン 恵子 平村 和美 松野 志歩 矢崎 理恵 (事務担当者 中谷多賀子)	①運営委員紹介 ②事業概要についての説明(矢崎) ③担当・職務についての確認 ④人材養成・研修についての意見交換 ⑤その他	③担当・職務、実施日を確認した。 日本語教室(高田馬場)講師:ディラン、アシスタント:未定。 11月10日～ 全12回 日本語教室(目黒)講師:松野、アシスタント:平村。 11月6日～ 全24回 アシスタントは最終的には公募。 ④文化庁サイド、地域発信、対話型日本語支援の大きな流れで進める
2	平成24年8月1日 17:00～ 20:00	3時間	社会福祉法人 さばうと21事務所	奥原 淳子 田中 美穂子 ディラン 恵子 平村 和美 中村 陽子 松野 志歩 矢崎 理恵	①人材養成・研修について ②日本語教室について ③教材作成について ④その他	①第1回研修から第5回研修までの流れを決定 第1回～第3回 2部構成 第1回の詳細決定 第4回では模擬授業実施 学習者にとっての教室とは？コミュニティとの関係は？ 教室-コミュニティ-対話-日本語習得
3	平成24年9月2日 18:00～20:00	2時間	社会福祉法人 さばうと21事務所	奥原 淳子 ディラン 恵子 平村 和美 中村 陽子 松野 志歩 矢崎 理恵	①人材養成・研修 第2回 目 ②人材養成・研修 第3回 目	①第1回目の研修の振り返り それをふまえての第2回目の研修の進め方 第2部において、いかに各自の課題を明確にし、共有をはかるか ②第2部において、第2回目の研修とどう関連付けていくか
4	平成24年10月21日 18:20～ 20:30	2時間10分	社会福祉法人 さばうと21事務所	奥原 淳子 ディラン 恵子 平村 和美 中村 陽子 松野 志歩 矢崎 理恵	①人材養成・研修 第1回 ～第3回 ②人材養成・研修 第4回・ 第5回 ③日本語教室・教材作成進 捗報告	①研修の前半終了 全体で振り返り ②第4回の研修の進め方、模擬授業から後半部への流れをどう進めるか
5	平成24年11月6日 18:30～ 20:30	2時間	社会福祉法人 さばうと21事務所	ディラン 恵子 平村 和美 中村 陽子 松野 志歩 矢崎 理恵	①日本語教室 昨年度の 授業の振り返り ②日本語教室 履修項目 (目黒、高田馬場)	②昨年度と同じ項目を採用、ビデオ撮影は回数を減らして実施。 履修項目:1. 人と付き合う 2. 住民としての手続き・マナー 3. 電車バス・徒歩移動 4. 物品購入・サービス 5. 医療関係・薬の利用 6. 事故・災害に備える。 外部の人を教室にお呼びする、外出する、教室内での活動など、意見交換
6	平成25年2月19日 18:00～ 20:00	2時間	社会福祉法人 さばうと21事務所	奥原 淳子 ディラン 恵子 平村 和美 中村 陽子 松野 志歩 矢崎 理恵	①人材養成・研修 第5回 の内容について検討(進め 方、アンケート用紙) ②日本語教室実施報告 ③報告書の作成	①第5回の進め方について意見交換。参加者の実践をどのように共有するか、参加者に向けての事前対応、当日の共有の方法 ③報告書作成の担当決定: 全体:矢崎 人材養成・研修:奥原



5. 日本語教室の設置・運営

(1) 講座名称

「難民のための参加型初級日本語講座」

(2) 目的・目標

本講座の目的は、以下の3点である。

- ①「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」を取り入れ、生活者としての外国出身者に特化した日本語教育を実践することにより、彼らにとって、日常生活において最低限必要となる生活上の行為を日本語で行えるようになる（または、行えるという意識がもてるようになる）こと
- ②ファシリテーターのもと、日本語ボランティアが日本語学習パートナーとして教室に参加し、参加する者全員が対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させること。社会の一員として活動をしていくこと。
- ③地域日本語教室において「標準的なカリキュラム案」のより効果的な活用のあり方を検討し、各教室で利用しやすい具体的な方策を検討すること。

参加者の難民の方々が、日本語で知らない人とやりとりをすることを敬遠しなくなること、あきらめの気持ちをもたなくなること、日本人ボランティアが外国出身者にもわかりやすい日本語を意識できるようになること、外国語習得の大変さを理解できるようになることが目標である。また、ひらがなやカタカナが自力で読めるようになることも目標とした。

(3) 対象者

東京近郊在住の難民で、日本語でのコミュニケーションがほとんどできない人

(4) 開催時間数(回数) 30 時間 (全 12 回)

(5) 使用した教材・リソース

- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」(文化審議会国語分科会)
- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集」(文化審議会国語分科会)
- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について」(文化審議会国語分科会)
- ・当法人作成の写真、絵カード、プリント教材
- ・携帯用絵教材(『みんなの日本語初級Ⅰ』動詞絵カード)
- ・当法人作成の動詞活用音声教材(丁寧・普通体)
- ・当法人作成(平成24年度文化庁委託事業)「生活場面切取動画」

(6) 受講者の総数 13 人

(出身・国籍別内訳 ミャンマー 13人)

(7) 受講者の募集方法

- ・広報用チラシの作成、さぼうと21学習支援室内掲示(*チラシ添付)
- ・広報用チラシの配布(難民関連団体7団体に送付、高田馬場ミャンマー料理店2店に広報協力依頼)
- ・ホームページでの案内(11月2日当法人ホームページ)

・メーリングリストでの案内(11月2日「なんみんフォーラム」)

(8) 日本語教室の具体的な内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者数	講師又は指導者名	補助者数	補助者	備考
1	平成24年11月17日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	13人	ミャンマー(13人)	(31)人と付き合う (47)電話をかける	・自己紹介(名刺カード等作成、自己紹介ビデオ撮影など) ・電話をかける(電話番号、欠席電話) ・基本動詞・基本語彙・ひらがな	1名	松野志歩	1名	平村和美	
2	平成24年11月24日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	12人	ミャンマー(12人)	(05)災害に備え、対応する (31)人と付き合う	・緊急電話のかけ方 ・近所の人に挨拶をする(いろいろな場面で)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
3	平成24年12月1日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	9人	ミャンマー(9人)	(10)電車、バス、飛行機、船等を利用する	・駅の情報を知る(SUICAの利用、駅員とのやりとり、駅の漢字や表示、SUICAカードの購入用紙記入、路線検索)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
4	平成24年12月8日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	12人	ミャンマー(12人)	(10)電車、バス、飛行機、船等を利用する (11)タクシーを利用する (12)徒歩で移動する	・バスの乗り方(時刻表を読む、やりとり) ・自分の住所を書く ・行きたい場所を伝える(道を聞く・タクシーでのやりとり)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
5	平成24年12月22日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	6人	ミャンマー(6人)	(08)物品購入・サービスを利用する	・店でのやりとり(実際にコンビニへ行く・物の有無と場所を聞く・動画視聴) ・年賀状購入→賀状を書く	1名	松野志歩	1名	平村和美	
6	平成24年1月12日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	7人	ミャンマー(7人)	(08)物品購入・サービスを利用する	・スーパーでの買物(一連の動作と言葉、物のありかを聞く) ・店員と話しながら購入(どんな物かを伝え、購入する)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
7	平成24年1月19日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	8人	ミャンマー(8人)	(34)住民としてのマナーを守る	・ゴミの分別(表現や言葉、ゴミ出しの曜日を聞く) ・役所について知る(問い合わせをする・ホームページでの情報の取り方)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
8	平成24年1月26日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	6人	ミャンマー(6人)	(33)住民としての手続きをする	・粗大ゴミの出し方(粗大ゴミの出し方を知る) ・役所で住民票をもらう(語彙、場所をたずねる、住民票を受け取る)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
9	平成24年2月2日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	6人	ミャンマー(6人)	(02)薬を利用する (01)医療機関で治療を受ける	・薬の種類と服用法を知る(体の部位、薬の種類、薬袋の情報を読み取る) ・病院で医師と簡単なやりとり(症状と受信する科、表現など)	1名	松野志歩	1名	平村和美	
10	平成24年2月9日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	6人	ミャンマー(6人)	(01)医療機関で治療を受ける (05)災害に備え、対応する	・健康診断の手順を知り、予約する(用語、問診票、予約のやりとり) ・緊急地震放送を聞く、準備を考える	1名	松野志歩	1名	平村和美	
11	平成24年2月16日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	7人	ミャンマー(7人)	(05)災害に備え、対応する	・大きな地震の時、まず何をするか、どこに逃げるか(内外のシミュレーション、防災マップ) ・パーティーの準備(希望を述べる、準備について話す)	1名	松野志歩	1名	羽毛田恵美	
12	平成24年2月23日 10:00~12:40	2時間 30分	レンタルスペース ゴブリン	7人	ミャンマー(7人)	修了パーティ	・学習の振り返り ・スピーチの発表	1名	松野志歩	1名	平村和美	

(9) 特徴的な授業風景

■2012年12月8日(土)

履修単位 IV-07 目的地に移動する 08 自力で移動する (12)徒歩で移動する

【目標】1. バスに乗る 2. 自分の住所を書く 3. 行きたい場所(自分の住所)を伝える

【内容】

1. バス停の場所を聞く、バスの時刻表を読みとる、バスに乗るときに質問する
2. 「東京都～区」+自分の住所、を漢字で書く練習
3. 人に道を聞く、タクシーで自宅に帰る(右・左に曲がる、まっすぐ)

- 基本動詞 5. 開ける、閉める、でかける 6. 押す、回す、消す 7. 貸す、直す、返す 8. 買う、払う、使う

・意味を絵カードで示し、辞書形とマス形を板書。→・CD を聞きながら、活用に合わせて復唱。

- ひらがな練習(は・ば・ぱ、ま行) 25 分

・書き順を示し、冊子に書く。→・フラッシュカードで読みの確認 ※(特には行の清濁)

・フラッシュカード+冊子で、形に似た文字(ぬとめ、すとむ、など)を読む練習。

- 基本語彙

・数字11～100、時刻(1～12 時、午前、午後、～半、5 分、10 分)を練習。

1. バスに乗る

・前回(電車に乗る)の復習(口、男、女、東西南北、乗り換えなど)、バス停の場所を聞く。

・バスの時刻表を読みとる(平日、土曜、休日、「一番早いのは何時?」「一番遅いのは何時?」など Q&A)

・バスに乗るペア練習(目黒駅～東京駅南口に行く客と車掌さんの役。

何口に着くか「東西南北」の漢字を見ながら変換)→発表

※「東西南北」の漢字を見て、すぐに口に出すのは、まだ難しそうだった。

2. 自分の住所を書く 30 分

・全員一緒に漢字(東京都・区)を練習。

・個別に住所の漢字をプリントで練習。

3. 行きたい場所(自分の住所)を伝える

・人に道を聞く、タクシーで自宅に帰る(右・左に曲がる、まっすぐ、コンビニ、銀行)

- まとめ

・プリントに、その日に学んだことを書いてもらう。

・宿題ではないが「基本500」冊子を配布。1 週休みなので、今までの箇所を復習するよう指示。



■2013年2月9日(土)

履修単元 I 健康を保つ 01(01) 医療機関で治療を受ける 02(05)災害に備え、対応する(地震)

【目標】1. 健康診断を予約する 2. 地震に備えて普段していること情報交換する

【内容】

1. 健康診断の手順を知り、予約の電話をかける
2. 緊急地震速報を聞き、地震に備えて普段準備している物について話す

●カタカナ練習 20分

・カタカナ一覧表で「ア」～「ン」…書き順を確認しながら、1回書く練習。

→フラッシュカードで読みを確認。

※カタカナのほうが、ひらがなより書くのはスムーズ。「ツ」と「シ」、「ワ」と「ク」の書きを重点的に。「ヌ」「ヨ」「ヲ」の読みが混乱気味だった。

●基本動詞 17.行く,持っていく,置く 18.聞く,書く,働く:絵カードで復習。

19.ぬぐ,およぐ,いそぐ 20.する,来る,持ってくる:絵カード&板書→CDを聞き活用を復唱。

1. 健康診断の手順を知り、予約の電話をかける

・健康診断時の用語(身体測定、血圧、血液検査、尿検査など)を練習。

・問診票の健康に関する質問を、簡単な言葉に置き換えて Q&A。

「おさけをのみますか」「いつも・よく・ときどき・たまに・すいません」(週に何回、以上、以下など)。

・病院に電話をし、健康診断の予約をするロールプレイ。(予約、初診など)

※病院側は松野&平村

※「区から来たハガキがなくても、無料 or 安く健康診断が受けられます」と言ったところ、実際に行ってみたいと学習者たちが熱心になったように感じた。

●基本語彙

・家具(つくえ、いす、…)の単語をプリントで。

・電化製品(テレビ、ドライヤー…)の単語をプリントで。「～がほしいです」を練習。

2. 緊急地震速報を聞き、地震に備えて普段準備している物について話す

・緊急地震速報(PCで)を聞き、「きんきゅうじしんそくほうです。つよいゆれにけいかいしてください」の意味を説明。震度0～7の揺れを簡単に説明。

・地震に備えて、どのような準備をしているか、を話しあう(家具の固定など)。

●まとめ

・プリントに、その日に学んだことを書いてもらう。



(10) 目標の達成状況・成果

- 修了時点まで受講を続けた受講生に対して行ったアンケート調査と教授者、補助者、コーディネーターの観察により達成状況・成果を判断する。

本講座の目的としてあげた3点について述べる。

- ①日常生活において最低限必要となる生活上の行為を日本語で行えるようになる(または、行えるという意識がもてるようになる)こと。

修了時のアンケート調査では、回答者 7 名全員が自身の日本語能力が向上したと評価している。また、「工作中・電車に乗っているとき・タクシーをひろうとき前よりスムーズになった」といった、具体的な場面を上げて能力の向上を記している受講者もあり、自己の日本語能力の評価が客観的に行えるようになっている点も一つの成果と考えられる。

さらに、「どういう風に生活すればいいかが勉強できて役に立った」「前に知らなかった日本についての知識やルールについて理解できるようになった」といった記述も見られ、「生活上の行為」の達成に対する肯定的な評価もみられる。これらの点は日本語教室の取り組みの大きな成果である。その点から、本目的は十分に達成することができたと言えよう。

- ②ファシリテーターのもと、日本語ボランティアが日本語学習パートナーとして教室に参加し、参加する者全員が対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させること。社会の一員として活動をしていくこと。

日本語ボランティアのクラスへの参加の仕方は今後の課題である。実際の教室では、どうしても日本人ボランティアが「教え」、外国人受講者が「教えてもらう」という関係になりやすく、「パートナー」の役割を果たしたとは言い難い。日本人参加者に対して、期待される役割や、してほしいこと、しないでほしいことを予めはっきりと伝え、また、授業最後には外国人受講者と同じように振り返りノートをつけてもらうなどすることで、改善が図られるかもしれない。

- ③「標準的なカリキュラム案」のより効果的な活用のあり方を検討し、各教室で利用しやすい具体的な方策を検討すること。

昨年度、今年度、共通する問題点は、「標準的なカリキュラム案」を使わなければならないという意識が先行しすぎて、本来大切にしなければならない「受講者のニーズ」把握や「対話」「相互理解」を重視した日本語教室の展開が十分には行えなかった点である。まずは、受講者のニーズをしっかりと把握し、「対話」を通じて臨機応変に授業展開が考えられるようであれば、「標準的なカリキュラム案」もより有効に利用されるのではないかと考えられる。

ただ、臨機応変に授業が展開されていく場合、教材や教具が準備しにくいという状況も生ずる。利用可能な教材を多くの日本語教室が共有しあえる環境が望まれる。

また、当初掲げた「参加者の難民の方々が、日本語で知らない人とやりとりをすることを敬遠しなくなる、あきらめの気持ちをもたなくなる」という目標は、アンケート回答者 7 名全員が「日本語が上達した」「日本語が出来るようになった」と肯定的評価をしており、「講座の期間が短い」、「勉強を続けたい」という前向きな感想を述べていることから、大いに達成できたと判断する。「日本人ボランティアが外国出身者にもわかりやすい日本語を意識できるようになること、外国語習得の大変さを理解できるようになること」という目標は、毎回参加ボランティアの顔ぶれが異なったため判断できない。「ひらがなやカタカナが自力で読めるようになること」は、受講者により差があるが、ほぼ達成できていた。

(11) 改善点について

大きく改善を要すると考える点は、以下の2点である。

- ①学習者のニーズやウォンツを知るために、学習開始前に多くの対話の時間を設け学習者・運営者の相互理解をはかること。また、「標準的なカリキュラム案」にふりまわされるのではなく、学習者のニーズに応え、ウォンツを満たすために、どのように授業運営をしていくか、「標準的なカリキュラム案」をいかに「利用するか」を考える必要を強く感じる。

修了時に実施したヒアリング調査では、多くの受講者から「病院での日本語を学びたい」という声が聞かれた。個人的な行為であり個人情報も多く、かつ、後回しにできない事態であることから、なかなか他者の力が借りにくいという経験を多くの外国人が経験している故であろう。このヒアリング結果を今後の日本語教室運営に生かしていきたい。

- ② 今回、当初予定していた高田馬場での日本語教室は受講を希望する方々が確保できず、開講にいたらなかった。まずは、想定した学習者について、おかれた現状や日本語学習の環境などを知るための調査が必要である。その上で、学習の場所、学習時間、内容などを検討したい。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称

「日本語教室ボランティア 振り返り&学び合い講座」

(2) 目的・目標

「標準的なカリキュラム案」と地域日本語教室との仲介的役割を担い、各教室のニーズや希望を反映させた日本語教育の実践を行う人材の養成を目標とする。また、「標準的なカリキュラム案」ととどまらず、生活者のための日本語教育のあり方を広く深く学び、地域日本語教室のあり方を参加者全員で考えたい。

(3) 対象者

- ・地域日本語教室で、3年以上の日本語ボランティア歴のある方
- ・日本語教師として2年以上の経験があり、地域日本語教室での活動に関心のある方

(4) 開催時間数(回数) 20 時間 (全 5 回)

(5) 使用した教材・リソース

- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案(文化審議会国語分科会)
- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集(文化審議会国語分科会)
- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について(文化審議会国語分科会)
- ・『日本語おしゃべりのたね 第2版』(澤田幸子他,スリーエーネットワーク)
- ・『外国人と対話しよう! にほんごボランティア手帖 すぐに使える活動ネタ集』(米勢治子・吉田聖子,凡人社)

(6) 受講者の総数 30 人

(出身・国籍別内訳 日本人 30 人)

(7) 受講者の募集方法

- ・広報用チラシの作成、さぼうと21学習支援室内掲示(*チラシ添付)
- ・ホームページでの案内(8月24日当法人ホームページ、その他ボラ市民ウェブ、日本語オンライン、日本語教育学会、スリーエーネットワーク、そうがく社、凡人社等)
- ・東京日本語ボランティアネットワーク、さいたま日本語ネットワーク、過去の当団体研修参加者への電子メールでの案内

(8) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者数	講師又は指導者名	補助者数	補助者	備考
1	平成24年9月2日 13:00~17:30	4時間 30分	さぼうと21	23人	日本(23人)	「標準的なカリキュラム案」とは？ーその理念・意義・期待される具体的な活動展開を知るー	第1部 1.「標準的なカリキュラム」を示した背景と経緯 2. 標準的なカリキュラム案の開発過程 3. 標準的なカリキュラム案の内容について 4. 標準的なカリキュラム案における言語・言語習得の考え方について 5.日本語教育プログラム作成 6.活動方法の例の具体的内容 7.「生活者としての外国人」に対する日本語教育と能力評価について	1名	加藤早苗	1名	奥原淳子	講師準備レジュメ・プリント 文化庁発表の資料
						在住外国人から地域日本語教室の日本語支援に対する意見や期待を聞く	第2部 学習経験者の話 ・自己紹介 ・ファンリターからの質問 ・受講者からの質問			1名	奥原淳子 MD MUJAHID LIA CING LAM MANG 池田遼江	なし
2	平成24年9月23日 13:00~17:30	4時間 30分	さぼうと21	22人	日本(22人)	この地域・この対象者・こんな活動-日系人(豊田)・難民(東京)・母親(山形)対象の日本語支援の現場発信から考える-	第1部 1.交流型日本語教室のプログラムデザイン-ニーズとウォンツを生かした教室活動- ・とよたシステムの概要 ・プログラム・デザイン 2.PHQ支援センターにおける難民への日本語教育-地域日本語支援の現場に還元できること- ・難民の受け入れと日本語教育 ・RHQ支援センターにおける日本語教育概要 ・指導内容 ・評価 3.外国出身子育てママのニーズと支援 ・山形県の外国人在住状況 ・外国人配偶者の背景 & 日本語支援状況 ・『子育て表現集』作成経緯 ・外国人ママたちへ「日本語支援」実践報告 ・本事業の日本語教育プログラム作成の手順 ・山形県での「生活者のための日本語教育」の方向性	3名	北村祐人 内藤真知子 横沢由実	1名	矢崎理恵	講師準備レジュメ・プリント
						自身の活動を振り返る	第2部 受講者各自の「課題」報告(グループ活動)			1名	奥原淳子	なし
3	平成24年10月21日 13:00~17:30	4時間 30分	さぼうと21	17人	日本(17人)	この教材・こんな活動-著者の描く活動展開から考える『日本語おしゃべりのたね』『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖すぐ使える活動ネタ集』をもとに	第1部 1.対話型活動の始め*『日本語 おしゃべりのたね』を例に-共に学び、共に変わり、共に変える活動を目指して- ・はじめに地域日本語教室の意義と理念を共有しよう ・「対話型中心」でほんとうに日本語がじょうずになる？ ・対話型活動の進め方-「日本語おしゃべりのたね 第2版」を例に ・対話型活動をうまく進めるためにボランティアが留意すること 2.「対話中心の活動」を実践するために ・第1回講座の振り返り(「生活者としての外国人」のために日本語教育事業) ・『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖すぐに使える活動ネタ集』が生まれた背景 ・「対話中心の活動」を実践すうために-入門期の人とコミュニケーション	2名	澤田幸子 吉田聖子	1名	中村陽子	講師準備レジュメ・プリント 『日本語おしゃべりのたね 第2版』 『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖 すぐ使える活動ネタ集』
						対話を通して課題を深める+具体的な実践の方策を探る	第2部 受講者各自の「課題」から、その解決に向けてアクションプランを探る(グループ活動)			1名	奥原淳子	なし
4	平成24年10月28日 13:00~16:30	3時間 30分	さぼうと21	14人	日本(14人)	模擬授業・活動案作成から考える日本語教室での日本語支援	第1部 モデル授業① モデル授業②	1名	西原鈴子 (アドバイザー)	1名	奥原淳子 NANG BANG TIN OO KHINE THIN THIN MYAT	模擬授業担当者準備プリント
						自身の課題解決にむけて具体的なアクションを提示し共有する	第2部 実践計画を報告 & 共有する 講評					なし
5	平成25年3月3日 13:00~16:00	3時間	ネットワークスラーニングセンター	10人	日本(10人)	実践報告から考える日本語教室での日本語支援	1.実践授業の報告(授業の趣旨・授業の実際・質疑) 2.教材作成の報告(作成の意図 & 手続き & 考え方・質疑) 3.受講者による実践報告 4.講評	1名	西原鈴子 (アドバイザー)	1名	中村陽子 松野志歩 平村和美	参加者提出の報告書 報告者作成のプリント

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

■2012年10月28日(日)

●第1部

【テーマ】

この教材・こんな活動ー著者の描く活動展開から考えるー

『日本語おしゃべりのたね』『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖 すぐに使える活動ネタ集』をもとに

【ねらい】

地域日本語教室での活動を念頭に作成された日本語学習教材の著者を迎え、教材作成の理念、教材の特徴、活動の心得、活動例などを学ぶ。

【内容】

I. 講師:澤田幸子 氏

テーマ:対話型活動の勧め*『日本語 おしゃべりのたね』を例にー共に学び、共に変わり、共に変える活動を目指してー

1. 本著の“幹”にしたことは？

(1)①コンセプト ②内容・構成 ③留意点

(2)ボランティアだからこその、ボランティアならではの活動は？ → 「おしゃべり！」

2. 「対話中心の活動」で日本語が上手になるのか？

(1)やさしい日本語を使っておしゃべりすることが日本語力を伸ばす

(2)使うことによって身につく

(3)ボランティアの上手な対応が習得を促進する

3. 『日本語おしゃべりのたね』を例に、対話型活動の進め方を学ぶ

(1)本著の内容:①対象②内容③活動の手引き④各ユニットの構成と進め方

(2)活動例

4. 対話型活動において留意することは？

(1)理解を確かめながらやさしい日本語で話す

(2)身振り、絵をかく、実物を見せるなどいろいろなコミュニケーション手段を活用する

(3)上手な聞き役になる

(4)「相手のことを聞く」には「わたしのこと」も話す

5. まとめ

II. 講師:吉田聖子 氏

テーマ:ー「対話中心の活動」を実践するためにー

0. 「生活者としての日本語」とは？本講座の位置づけを振り返る。

1. 本著のテーマ

＝入門期の人とのコミュニケーション

2. 対話に必要な働きかけや活動を考える

・対話活動の「促し」や相手からの話を引き出す方法を考える ※グループ活動

・「自己紹介」というスチエーションでどんな活動が考えられるだろうか？

3. 教室づくりが大切

外国人参加者が来たいと思うような教室をつくろう

4. 本著の活動例

p42, p119, p97

レシートを使った活動

5. 活動案を考える

グループ活動→全体で共有

6. まとめ

Ⅲ. 全体での振り返り&アンケート記入

質疑応答

アンケート記入

●第2部

【ねらい】

自身の課題を見つめ、課題解決に向けたアクションプランを立て実践する。

第2回では、「対話を通して自身の課題を掘り下げる」活動を行った。この第3回では、それを踏まえ、再度、受講者同士の対話を続けながら、自身の課題を深めるとともに、課題の解決に向けた具体的な方策を探る。

【内容】

(1)グループ編成&グループ内自己紹介(3~4人・/1グループ)

(2)・課題を & 課題解決に向けた具体策を探る(グループでの話し合い)

・より多くの受講者からのコメントをもらう

①各自課題を A3 用紙に書き込む

②①を回覧し、書かれた課題に対し、コメント(経験談・共感・アドバイス等)を書く

③②を実践プランの参考として役立てる

(3)まとめ・アンケート記入



■2013年3月3日(日)

【テーマ】

一人一人の課題と実践を全体で共有し、支援者としての役割や地域日本語教室のあり方とともに考える

【内容】

自身の活動を振り返って見えてきた課題と、その解決に向けての実践を報告する

(1) 授業実践報告(松野志保)

運営委員の授業実践を振り返る

① クラス概要

② 学習内容(各回の流れ・目標・テーマ)

③ 振り返り

④ 質疑応答

(2) 教材作成報告(平村和美)

① 教材作成の目的

② 作成した動画の紹介

③ 作成の手順

④ 振り返り(a.作成して b.使用して)

⑤ 質疑応答

(3) 受講者による実践活動の報告

各自の課題、そして、その解決の方策としての実践活動を、一人5～10分報告。

報告後、質疑応答。

(4) 講評(西原鈴子氏)



(10) 目標の達成状況・成果

① 受講生に対するアンケート

各講座終了時にアンケートを実施し、受講者より評価・意見を聞いた。集計結果は以下の通りである。(1)(2)は選択式(5段階尺度)で、他は記述式。各回の記述式箇所は参考として適宜評価の中に記した。

(1) 講座の内容はわかりやすかったですか

	大変わかり やすかった	わかり やすかった	どちらでも ない	わかり にくかった	大変わかり にくかった	記述なし	計
1回	9	11	2	0	0	0	22
2回	13	6	1	0	0	0	20
3回	12	3	0	0	0	1	16
計	34	20	3	0	0	1	58
%	58.6	34.5	5.2	0	0	1.7	100.0

(2) 講座で期待していた内容を得られましたか

	得られた	だいたい得られた	どちらでもない	あまり得られなかった	全く得られなかった	記述なし	計
1回	10	9	3	0	0	0	22
2回	12	6	0	1	0	1	20
3回	11	3	1	0	0	1	16
計	33	18	4	1	0	2	58
%	56.9	31.0	6.9	1.7	0	3.4	100.0

全体(第1回～第5回)を振り返ってのコメント

- 自分の授業を見直し、生活に密着している授業を目指すことで、私の課題であった帰国者と日本人をつなぐことをこれからも考えたいと思います。
- 今まで気付かなかった、知らなかったことにふれられてよかったです。
- 間があいての(実践をした後の)報告がとてもよかったです。ずーと頭の片すみにあって、私を苦しめました。
- 効率よくいかに学習者のニーズ、ウォンツを見つけ出し、それに対応学習することによって最終的に学習がそれぞれの地域になじんで自立した生活がおくれるようにすることに少しでも役立てればという考えが強くなり勉強になりました。
- 長い期間あいたように気がしたが、これがまたゆっくりと思い出し実践していくものを見つけ出すことがありよかった。
- とてもよかったと思います。
- これからの活動の方向がはっきりしました。
- 非常に得るものが多かった(特にモチベーションの点で)が、1～5回の間隔が空いて、少し間延びした感じがしました。
- 各活動や意見を交換する時間がよかった。
- いろいろなことを知り、大変よかったです。

②実施主体からの研修内容結果評価

本講座の柱である「標準的なカリキュラム」「振り返り&学び合い」の二つの点から研修を振り返りたい。

「標準的なカリキュラム案」(以下、カリキュラム案)

受講者にとって、本研修はカリキュラム案を学ぶ好機となったと考える。開講時のヒアリングでは、カリキュラム案を知らない、もしくは、聞いたことはあるが使っていないという受講者がほとんどであった。しかし、今回カリキュラム案の制作に直接かかわった講師をお呼びし、その理念や具体的な使用方法をうかがったことで、カリキュラム案が利用可能なリソースとして位置付けられたのではないと思う。アンケートでも「カリキュラム案が何の為にあり、どう使うべきかよく理解できた」「本来の目的を理解することができた」「文化庁からの冊子を手にしたことはありましたが、なかなか読めずにいました。今回の講座で全体像がわかりどう参考にするのかが理解できました」などの声が見られた。

また、カリキュラム案とは別にしても、その理念や活動例を学ぶことを通して、「生活者としての外国人」ということの整理ができた」「今やるべき生活上の行為について改めて考え直し教案をつくろうという意欲が出ました」等、学習者にどう向き合ったらいいのか再考する場となったこともうかがえた。支援者としての姿勢、地域日本語教室のあり方を見直す契機となったと言える。

「振り返り&学び合い」

受講者自身の振り返りの時間が持てたことと、それを受講者間で共有できたことは大きな成果であった。受講者にとっても貴重な時間となったようで、次のようなコメントをいただいた。

- ・みなさんの課題を聞かせていただき、共感したり驚いたり。とてもとても刺激的！です
- ・色々な地域、学習者も様々で、その様子をうかがうだけでもお互い勉強になったと思います。
- ・お一人お一人が、理念を持って、活動を行っていることを知ることができました。

また、振り返りの時間がより充実したものとなったのは、研修前半の講師の方々のお話があったためであろう。講師のみなさんは、それぞれの分野で熱心に活躍されている方々ばかりで、「先生の一言で目の前が明るくなった」「忘れがちな基本的なことを再考する機会となった」などのコメントのように、そのパワーと姿勢、示された具体的な試みは、受講者の振り返り活動の大きな刺激となった。

(11) 改善点について

全5回の研修であったが、特に4・5回で参加者数が減ってしまった点は、今回の研修での課題である。減った理由として、二つのことを考えている。

一つは、本研修が「受講者自身が課題を探り、それを解決する方策を立て実践してみる」という内容であったため、負担が大きかったのではないかという点である。「主催側による企画立案・実施といった一方向の内容/形式でなく、受講者自身が問題点を発見し、解決の方策を探るといった主体的・自発的な参加の仕方もある新たな形式として考えてみたい」という昨年の研修を踏まえた試みであるが、「主体的・自発的な参加」の具体的な形は再度検討を要する。

もう一つは、開催日のことが考えられる。日曜日としたことと、第4回から第5回の間に4か月空かたことである。日曜日開催としたのは、これも昨年の反省に基づいている。「日曜日でも来る」という意欲の高い受講者が来ることを期待した試みであった。開催日は受講者にとって受講、継続を決める大きな要素となるので、改めて考えてみたい。また、4か月間空けたのは、各自が実践活動を行う期間として必要であったが、これには「間があいての(実践をした後の)報告がとてもよかったです」「やる気がある時にもう少し詰めた日程で行うと参加者同士の仲間意識が早い段階で生まれたかな」と受講者の評価も分かれる。ただ、間を空けるにしろ、研修に対するモチベーションを持続させていくための継続的なフォローは必要であった。次回の課題とした。

受講者に最後まで期待に胸弾ませて足を運んでもらえるよう、より充実した研修を企画立案していきたい。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

(1) 教材名称

「生活場面切りとり動画」

(2) 対象

当団体主催難民のための参加型初級日本語講座」参加者

「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教室に参加する在住外国人

国内外で日本語を学習する外国人

(3) 目的・目標

動画教材作成の目的は、「標準的なカリキュラム案」を活用した日本語教室において、有益な教材が提供され、教室での日本語学習が円滑に進められるようになることである。

「標準的なカリキュラム案」で示された生活上の行為(の一部)について、それらの行為の流れや動きをわかりやすく収めた動画教材を作成し、一般に公開することを目標とする。

(4) 構成

作成した教材は以下のとおりである。

タイトル	場面	登場人物	長さ
I 健康・安全に暮らす			
01健康を保つ 病院編 【字幕あり・なし】	歯科医での受付・診察 ・会計・次回予約までの流れ	医師・受付担当・患者	3:49
01健康を保つ 薬局編 【字幕あり・なし】	頭痛薬の購入 適当なものを尋ねる	薬剤師・客	1:33
01健康を保つ 調剤薬局編 【字幕なし】	処方箋の提出、調剤薬局へ 行き、薬を購入する	薬剤師・患者	2:52
III消費活動を行う			
05サービスを利用する ファミレス編 【字幕あり・なし】	ファミレスでの入口でのやり取り、 注文、会計までの流れ	店員・客	2:18
05サービスを利用する 美容院編 【字幕あり・なし】	予約、受付、シャンプー、カット、 カラー、ブロー、会計、一連の流れ	美容師数名・客	11:08
05物品購入 衣料品編 【字幕あり】	衣料品について店員とのやり取り、 試着、交換、購入、カード会計 までの流れ	店員・客	4:10
05物品購入 コンビニ編 【字幕あり】	商品の有無、場所等を尋ねる	店員・客	1:18
IV目的地に移動する			
07公共交通機関を 利用する 電車編 【字幕あり】	目的地まで、どの電車に乗るかを 尋ねる、スイカをかざす	女・通行人	1:03
07公共交通機関を 利用する 電車編 【字幕あり】	乗り換える駅までの道を尋ねる	女・通行人	1:44
VII人とかかわる			

14他者との関係を円滑にする 会社編 【字幕なし】	新入社員が部署内で挨拶する	会社役員 社員数名・新入社員	0:56
14他者との関係を円滑にする 会社編 【字幕なし】	会社員同士が名刺交換をする	会社員2名	0:26
14他者との関係を円滑にする 飲み会編 【字幕なし】	新入社員が歓迎会での挨拶する	会社役員 社員数名・新入社員	1:10
14他者との関係を円滑にする 飲み会編 【字幕あり】	社員同士の飲み会の席で最初にコミュニケーションを図る	同じ会社の社員2名	0:50
14他者との関係を円滑にする アルバイト編 【字幕なし】	初めてのアルバイト先で挨拶する	店長・新人アルバイト	0:23
14他者との関係を円滑にする 電話編 【字幕なし】	子供の学校に欠席連絡を入れる	母親・担任教師	1:19
14他者との関係を円滑にする 挨拶編 【字幕なし】	同じアパートの住人同士が挨拶する	アパートの住人2名	0:31
14他者との関係を円滑にする 挨拶編 【字幕なし】	転居先で、アパートの管理人へ挨拶する	管理人・住人	0:31
14他者との関係を円滑にする 引越し挨拶編 【字幕なし】	転居先で、隣人へ挨拶する	同じアパートの住人で隣人2名	1:24
Ⅷ社会の一員となる			
15住民としての手続きをする 区役所編 【字幕あり】	住民票を取る、請求書を書く、会計までの流れ	区役所員・男	2:42
15住民としてのマナーを守る ゴミ分別編 【字幕なし】	ゴミの分別を管理人に尋ねる 分別しないで出す、注意を受ける	管理人 住人2名	2:11

(5) 使い方

使い方は教室により、また学習者の関心や日本語能力により様々であるが、以下にその使い方の1例を示す。

- ①学習者に、動画集の目次(絵や写真)より、興味のある「生活上の行為」の動画を選択してもらう
- ②参加者全員で、動画を最初から最後まで通して視聴する
- ③動画で紹介された生活上の行為について、参加者全員で話す(必要に応じて動画を見る)
- ④日本語に注目しながら、動画を止めながら視聴し、表現や語彙、身振りなどを学ぶ
- ⑤日本語学習の環境によるが、実際に動画をもとに学んだのと同様の行為、もしくはそれに近い行為の達成を目指した活動をする

(6) 具体的な活用例

(5)の使い方に重なる部分であるが、例えば、「住民票を入手する」という行為の達成が求められる場合を考えてみたい。

①教室で「住民票を入手する」の動画を用い、(5)に示されたような流れで授業を行う。

地域に密着した日本語教室であれば、学習者が訪ねる先の役所の見取図や実際に使用されている申請書が用意されていれば、学習者にとってはより有効であろう。

その過程で、「場所の聞き方」「場所の説明を受けた時に必要な語彙」「住所や名前の書き方」「確認の仕方」などの練習が必要になるかもしれない。

②実際にその日の行動を参加者がシミュレーションしてみて、さらに必要となる「行為」を考えてみる。

「目的地への行き方の方法の確認」(場合によりインターネットを利用した場所や乗り換え案内の検索)、「道の聞き方」などを必要ということであれば、動画集よりさらにそれらの「行為」の動画を選び、同様の流れで練習する。

③学習者による行為の実行

④再度、教室において、振り返りを行う。

実際に住民票を入手する際に困ったことや、覚えたいと思った表現、語彙を確認する
※日本語支援者は、実際に役所に同行して本人に代わって行為の達成を手助けすることも可能かもしれないが、いずれにせよ、「2 回目は支援者なしで一人で同様の行為が達成できる」ことが、生活者にとっては非常に重要であり、それを念頭においた日本語支援を行う必要があると考えている。

(7) 成果物の添付

現時点で作成した動画教材は CD に収めた通りである。

現在、動画教材の一般公開に向けて、出演者や撮影場所の確認を行っており、また当団体のホームページがリニューアルされることから、2013 年 6 月初旬を目途にホームページ上に掲載する作業を進めている。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

本事業の目的は、日本に暮らす外国人住民と日本人住民が共に学び、共に社会の一員として成長できるような日本語教室を展開していくことである。

また、国の施策の一環として文化庁が主体となって進めている「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」(以下「カリキュラム案」)につき、現場での実践に基づいた発信をしていくことも事業実施の目的の一つである。

当団体は平成 23 年度、文化庁委託事業として「定住外国人のための 60 時間参加型日本語講座」を実施し、「標準的なカリキュラム案」を活用した日本語授業を試みた。その終了時に抱えた様々な疑問を解消すべく、今年度もその発展延長線上で「標準的なカリキュラム案」が有効に活用できる方法を模索した。

今年度は以下の通り5つの目標を設定した。

- 1 「標準的なカリキュラム案」と「教室」をつなぎ、それぞれの教室独自の形で日本語授業を実践できるファシリテーターを養成すること
- 2 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育を実施することにより、外国出身者、ボランティアが対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させること、双方の社会参加を可能にすること
- 3 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育の実践例を公開し、地域日本語教室に「標準的なカリキュラム案」をより身近なものとしてとらえてもらうこと
- 4 授業実践を通じて「標準的なカリキュラム案」のより効果的な活用のあり方を検討するとともに地域日本語教室で利用しやすい具体的な方策を検討すること
- 5 「標準的なカリキュラム案」をより効果的に活用していくための具体的な方策の一つとして、視聴覚教材(動画教材・音声教材)を作成すること

(2) 目標の達成状況・事業の成果

(1)に示した5つの目標について、その成果を検討する。

1 ファシリテーターの養成

●ボランティア向け講座に参加した受講者のアンケート回答を参考とする

6-(10)で検証したとおり、本目標は十分に達成できたと判断する。多方面で活躍する受講者が集まったこと、各自の実践を含めた研修を行ったこと、受講者同士の話し合いの時間を多く設けたことが、その要因ではないかと考えられる。それぞれの教室独自の授業実践は現時点では判断できないものであるが、受講者同士のネットワークを構築していくことが、今後の実践への励ましともなり、重要ではないかと考える。

2 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育を実施することにより、外国出身者、ボランティアが対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させること、双方の社会参加を可能にする

●日本語教室受講者向けに行ったアンケート回答、インタビュー回答を参考とする

●ボランティア向け講座第 5 回で行った日本語授業報告への参加者からのコメント等、および報告後の担当講師、アシスタントの振り返りコメントを参考とする

日本語力の向上については、5-(10)で検証したとおり、受講者から自身からも高く評価されている。また、日本語教室への参加が受講者の社会参加の意欲を向上させるきっかけとも

なった。

しかし、その一方で「標準的なカリキュラム案」を用いること自体が目的のようになってしまい、本当に学習者が学びたいこと、学ぶ必要があることを十分に吸収できなかったのではないかという反省も残る。また、教室に参加するボランティアの役割や、教室での立場が不明瞭であったこともあり、ともすればボランティアは「共に学び育つ参加者」ではなく「日本語の先生」のような立場になりがちであった。担当講師、アシスタント、受講生、ボランティア全員が、それぞれの役割を確認しあい、それぞれの参加の姿勢を意識して、全員が教室作りに参画できるような教室運営も大事ではないかと思われる。早い時期に、通訳をまじえてそうした話し合いの時間を確保することで、「対話を通じて相互理解を深め、コミュニケーション力を向上させる」ための教室運営が可能となるのではないかと思われる。

3 「標準的なカリキュラム案」を用いた日本語教育の実践例を公開し、地域日本語教室に「標準的なカリキュラム案」をより身近なものとしてとらえてもらう

- ボランティア向け講座に参加した受講者のアンケート回答を参考とする
- ボランティア向け講座第 5 回で行った日本語授業報告への参加者からのコメント等、および報告後の担当講師、アシスタントの振り返りコメントを参考とする

ボランティア向け講座第 5 回で実際の日本語教室の授業の様子を参加者全員で視聴した。「公開」の第一歩ととらえている。また、先にも記した通り、ボランティア向け講座参加者にとっては、「標準的なカリキュラム案」がより身近なものとしてとらえられたのではないかと思われる。さらに、2 年連続して「標準的なカリキュラム案」を学ぶためのボランティア向け講座、「標準的なカリキュラム案」を積極的に取り入れた日本語教室を実施したことにより、運営委員をはじめ、そこに関わる者たちの中に、より具体的な「カリキュラム案」のイメージができた。

ただし、日頃、地域日本語教室関係者と関わる中では、あいかわらず「標準的なカリキュラム案」についての言及はほとんど聞かれない。同カリキュラム案が全国の日本語教室関係者の中でいかに認識され、活用されているのか、そろそろ文化庁側の調査報告がなされてもよい段階になっているのではないだろうか。そして、今後、文化庁側が、「標準的なカリキュラム案」に関心を「もたない」日本語教室や日本語ボランティアに対してその意義や効果を示していただくことを強く希望する。

4 授業実践を通じて「標準的なカリキュラム案」のより効果的な活用のあり方を検討するとともに地域日本語教室で利用しやすい具体的な方策を検討する

- ボランティア向け講座に参加した受講者のアンケート回答を参考とする

「標準的なカリキュラム案」に関連して発表されている教材例集については、直接の利用が難しいものが多く、これは「例」と銘打っている以上、当然と言えば当然のことではあるが、「計画された授業/日本語支援」「臨機応変に受講者のニーズやウォンツに対応した授業/日本語支援が行える日本語指導者」のどちらかがなければ、実際には効果的活用は難しいのではな

いだろうか。実際の日本語教室の現状を考えると、「標準的なカリキュラム案」を効果的に活用できる「時間」や「人」は備わっていない。

また、2年にわたってクラス授業で様々な展開を考えてみたが、来日直後の学習者であれば、ある程度そのニーズも一致する可能性はあるが、来日経緯や来日後の環境などが大きく異なる「生活者」の場合、クラス授業において標準的なカリキュラム案を活用していくことは難しいのではないかと感じている。

5 「標準的なカリキュラム案」をより効果的に活用していくための具体的な方策の一つとして、視聴覚教材(動画教材・音声教材)を作成する

●ボランティア向け講座第5回で行った教材作成報告への参加者からのコメント等、および報告後の担当講師、アシスタントの振り返りコメントを参考とする

一部、撮影場所の許可がおりず、動画作成ができなかったものがあるが、ほぼ当初の予定通り作成を完了した。「その使い方が具体的にイメージしにくい」というコメントもあるが、パソコンが使用できる環境にあり、個別学習の環境があれば、「標準的なカリキュラム案」活用のための具体的なツールとなるのではないだろうか。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

地域での活用について、実際に気づいた点などは、(2)に記したとおりである。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

今回、ボランティア向け講座を通じて、主に東京都内で活動する多くの日本語指導者/日本語支援者と意見交換ができた点は有意義であった。日本語教室の活動は、ややもすれば内向きになり、内輪の満足に終わってしまったり、新しい展開に消極的になったりしかねないが、講座参加は参加者に「対話と相互理解」の機会を与えてくれたように思う。それがさらに前向きに日本語教室継続の力となると実感している。

また、今回はとくに動画教材の作成を通じて、日常生活においてはほとんど外国人に関心をもつことのない地域の方々の協力を仰ぐこととなった。そのこと自体が非常に意義のあることだったと感じる。

(5) 改善点、今後の課題について

一部、先に記したことと重なる部分があるが、3つの取組をととしての課題や改善点をまとめておく。

①平成23年度、24年度の取組をいかに次年度以降の現場での取組につなげていけるか

昨年度、今年度は、「標準的なカリキュラム案」について、講義、意見交換、日本語教室実施、教材作成などを通して理解を深め、教室現場にいかに反映させられるかを検討したが、今の段階では現場での有効活用には至っていない。当法人が運営する学習支援室はじめ、地域の日本語教室の現場がいかに「標準的なカリキュラム案」を有効に活用していけるか具体的な方策を検討することが今後の大きな課題である。

現時点では、先に記したとおり、個別学習または少人数学習の形で、学習者のニーズやウォンツを確認した上で、対話に重きをおきつつ、無理のない形で標準的なカリキュラム案も活用していく、という進め方が現実的ではないかと思われる。

また、今年度事業で着手した「生活場面切りとり動画」の場を増やし、さらに紙ベースの「動画(索引)集」を作成することで、教室活動を活性化できる可能性があるように思われる。

②日本での定住を決めながら、日本語学習のために日本語教室を訪れることのない外国人にどのように対応していったらよいか

今年度、学習者の交通費負担を軽減すべく、想定していた学習者である難民の集住地域高田馬場での日本語教室を予定したが、結果的に学習者が集まらず実施に至らなかった。日本語教室まで日本語を学びに来ない定住外国人をいかに教室現場に迎え入れることができるかが、当法人が抱える大きな課題でもある。

新しく来日する外国人には、早い時期に集中して日本語を学べる場所が必要であり、口コミを主な広報の手段とせざるをえない難民については、定期的に決まった場所で授業が行われている必要がある。学習者の人数の増減の可能性を考えると、これはぜひ公的機関で対応を検討していただきたい点である。

また、来日から何年もたっているが、日本語はほとんどできない外国人については、まずはそのニーズやウォンツを知るための実態調査が必要ではないかと思われる。

③地域日本語教室で活動するボランティアのネットワークの強化

文化庁委託事業等を通して共に学んだ研修参加者や講師、運営委員が、その後も良い形で連携をとり、互いの活動を発展させていくためには、研修終了後も互いの情報を交換したり、活動の様子を知らせたりできることが望ましい。

現在、ネットワーク強化の一手段として、運営委員を中心に地域の日本語教室の情報交換が可能なネット上のサイトを作成しているが、管理者の負担軽減、情報の分類方法などが当面の課題である。